

# リポート Report

大磯町郷土資料館だより  
2022・3・11

42

## 目次

- 2 旧滄浪閣ホール棟と西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸を大磯町指定有形文化財に指定
- 3 ミニパネル展示「吉田茂の愛犬たち」
- 4 大磯 鍋島邸の領収証
- 6 煉瓦造の鉄道橋梁について～押切架道橋の建設時期と経緯～
- 8 戦後の吉田茂と親族の交流



大磯町郷土資料館は、令和3年（2021）7月31日に来館者100万人を達成しました。



令和2年12月18日に町指定有形文化財に指定された、旧ホテル滄浪閣ホール棟の北側外観写真。外観は現在とは異なっており、昭和29年（1954）から昭和32年頃に撮影されたものと思われます。

## 旧滄浪閣ホール棟と西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸を大磯町指定有形文化財に指定

国土交通省関東地方整備局、神奈川県、大磯町は、「明治150年」関連施策の一環として、大磯町東小磯、西小磯に位置する伊藤博文邸跡（旧滄浪閣）等の建物群及び緑地を「明治記念大磯邸園」として整備を進めています。邸園の計画区域は伊藤博文、大隈重信、陸奥宗光、西園寺公望の4名の邸宅、庭園があった場所です。『Report ー大磯町郷土資料館だよりー No.41』に、邸園を構成する邸宅のうち、旧大隈重信別邸・旧古河別邸と陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸の2件が町指定有形文化財に指定されたことを報告しました。その後、更に2件が町指定文化財となりましたので、追加報告いたします。

旧滄浪閣ホール棟は、平成20年（2008）11月に指定された「滄浪閣（伊藤博文邸宅跡 旧李王家別邸）6棟 附 杉戸絵4枚」の一体として、町指定有形文化財に指定されていました。しかし、平成31年に行った国土交通省の調査により、ホール棟の建築年代が滄浪閣の他の棟と異なる事実が判明したため、ホール棟を指定範囲から外して指定名称及び範囲を改めるとともに、ホール棟の文化財的価値を検証しました。町文化財専門委員会議に答申を求め、ホール棟は新たな文化財的価値をもって、令和2年（2020）12月18日に町指定有形文化財に指定されました。

指定理由としては、ホール棟は昭和27年（1952）から28年の間にアメリカ駐留軍関係者向けの保養施設として新築されたものであり、当町の戦後史を物語る貴重な建物であること、伊藤博文が命名した「滄浪閣」の名を継承した飲食施設として長く町民に親しまれてきたこと、国道1号沿いに展開する別荘建築群の中で象徴的な存在であるとともに、松並木と一体となって当町の歴史的景観に寄与してきたことなどが挙げられました。指定名称は「旧ホテル滄浪閣ホール棟1棟」です。なお、滄浪閣の指定名称は「旧滄浪閣（旧李王家別邸・伊藤博文邸跡）5棟 附 敷地1筆、杉戸絵4枚」に変更いたしました。

続いては、西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸の指定

に関する報告です。西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸は、「旧池田成彬別邸（西園寺公望別邸跡）3棟1基 主屋、車庫、ポンプ室、門」を指定名称として、令和3年10月22日に町指定有形文化財に指定されました。邸宅は内閣総理大臣を歴任した西園寺公望の別邸跡地に、三井合名会社筆頭常務理事や日本銀行総裁、大蔵大臣を歴任した池田成彬の別邸として、昭和7年に建てられたものです。設計は曾禰中條建築事務所、施工は竹中工務店によるもので、生活空間の全てが洋式となっている、昭和初期としては数少ない本格的な洋館建築です。洋館の主屋だけでなく車庫やポンプ室、門を含め、ほぼ当時の建物が現存しています。英国風の様式を意識した意匠とともに、鉄筋コンクリートの堅牢な造りは、昭和初期の建築技術を伝える貴重な建物として評価できます。

2件の文化財指定により、明治記念大磯邸園を構成する邸宅はすべて町指定有形文化財になりました。今後は、公開に向けて保存活用のための整備が進められます。

### 引用・参考文献

- ・国土交通省関東地方整備局（2020）『明治記念大磯邸園邸宅保存活用計画（案）中間とりまとめ』

（当館副館長／北水慶一）



（上）旧滄浪閣ホール棟（下）西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸  
写真協力はいずれも国営昭和記念公園事務所

## ミニパネル展示「吉田茂の愛犬たち」

令和3年（2021）4月から半年間の会期中、旧吉田茂邸内の展示・休憩コーナーにおいて、吉田茂の愛犬にスポットを当てたミニパネル展示を行いました。主役が動物という異色企画が実現した経緯、新資料の発見、コロナ禍に對峙する博物館の新たな取り組みについてご紹介します。



ケアーン・テリアを抱く吉田茂  
(昭和30年代)

### 写真資料のデジタル化

令和2年度に目録が刊行された吉田家旧蔵資料には、多くの写真資料が含まれています。私は、その写真類のデジタル化を担当していましたが、その中に「家のワンちゃん達」「他家のワンちゃん」という、他とはちょっと毛色の違うアルバムがありました。犬の写真ばかりで人間がほとんど写っていないそのアルバムは、当初、活用は難しいだろうと思われました。

ところが、写真をアルバムからはずしてみると、その裏面には愛情のこもった細かな書き込みがたくさん隠れていることがわかりました。現代では、愛犬を家族の一員として人間と同等に扱うことはめずらしくありませんが、あの吉田茂もそうだったのかと思うと笑いがこみ上げ、親しみを覚えました。他の学芸員に笑い話のつもりで「犬だらけで、愛犬の血統図が作れそうですよ」と言うところ「本当に作ってみてはどうか」と勧められました。それではと、試しにアルバムに書き込まれた情報を整理してみたところ、吉田茂の飼っていたケアーン・テリアの血統図が出来上がりました。

### ワンワン宰相

血統図作成をきっかけに愛犬家・吉田茂に興味をそそられ調べてみると、吉田と犬との逸話は衆目を集めるトピックだったようで、吉田が小学5年生の少女の手紙に答えて愛犬を譲った話や、映画やドラ

マで活躍したスター犬の子どもを吉田家に迎えた話など、吉田の愛犬家ぶりを伝える魅力的なエピソードが様々な文献や新聞・雑誌の記事に取り上げられていました。それらのエピソードに愛犬たちの写真を加え、ミニパネル展「吉田茂の愛犬たち」として展示を開催することになりました。

### 新たな資料～岡崎島子聞き書き

この展示を開催したことで、吉田の愛犬についての情報をいただく機会が増え、展示後にも新たな資料の発見がありました。

吉田から子犬を譲り受けた里親たちの中に、第三次から第五次まで吉田内閣で外務大臣を務めた岡崎勝男がいます。その妻・島子に、財団法人吉田茂記念事業財団が聞き取り調査を行った際の資料が見つかりました。岡崎家で愛情を一身に受けていたローマというケアーン・テリアは、昭和36年（1961）にジャパンケネルクラブの支部大会で優勝しました。愛犬の慶事に、島子は赤飯を炊いて祝い、吉田宛に「ローマ優勝す 御乾杯あれ」と電報を打ったそうです。すると吉田からは「めでたし、めでたし、日本一、岡崎ローマ君万才」という返電がありました。そのことを後で聞いた岡崎勝男は、「こんな電報を配達するひとの身にもなってみよ」と妻を諷めたということです。

吉田が島子に書き送った書簡などから、二人は犬への愛情深さに相通ずるところがあったのだろうということはわかっていたのですが、そのことを象徴的に表すエピソードであると思います。

### with コロナ

このコロナ禍の中、施設に足を運べないでいる方々のために、オンラインコンテンツを公開する博物館が増えてきています。当館でもウェブサイトやブログ、SNS等で様々な情報を発信しています。今回の展示は、YouTubeにて解説動画を公開し、会期終了後も引き続き視聴可能となっています。こうしたウェブの活用は、これからの博物館活動の柱の一つになっていくのではないのでしょうか。

(当館学芸員／中原園子)

## 大磯 鍋島邸の領収証

大磯町郷土資料館（以下、当館）では、郷土の歴史にかかわる資料を多数所蔵しています。所蔵している資料の多くは、当館の活動にご理解いただきました皆様からご寄贈いただいたものですが、古書店等で見つかった大磯に関する資料を購入することもあります。

平成 27 年（2015）、大磯に別邸を持っていた鍋島家に関する資料が古書店から見つかり、大磯の邸宅に関する資料も含まれていたことから、購入しました。この資料群は全部で 19 点あり、年代は明治 9 年（1876）から昭和 25 年（1950）頃のもです。鍋島家に関する資料は、主に 11 代鍋島直大の法要なほひろに関する資料など、大正時代の私的な記録です。その中に、表紙に「大磯本邸」と書かれた昭和 21 年から 25 年の領収証の綴りがありました。

### 大磯の鍋島別邸

大磯に別邸を構えた鍋島直大は、弘化 3 年（1846）に生まれ、文久元年（1861）に佐賀藩主となり、明治政府のもとでは貴族院議員など、要職を歴任しました。大磯町役場の建物台帳によると、直大は明治 30 年 3 月 31 日に建物の申請を届け出ているため、この頃、大磯に別邸を構えたと考えられます。ちなみに直大の次女の伊都子いづこは梨本宮妃となり、梨本宮の別邸も大正 2 年（1913）に大磯町西小磯に建てられました。

鍋島別邸の所在地は大磯町西小磯で、西隣に伊藤博文の邸宅「滄浪閣」、東隣に大隈重信の別邸がありました。直大が大正 10 年に没すると、所有者は次代なおみつの 12 代直映に引き継がれます。大正 12 年 9 月 1 日に発生した関東大震災では、大磯も大きな被害を受け、鍋島別邸の建物は倒壊しました。その後、大正 15 年 3 月に再建された建物は、平成 8 年までこの地にありました。

鍋島家の本邸は、現在の東京都千代田区永田町にありましたが、昭和 21 年から 25 年の領収証の綴りには「大磯本邸」と書かれているため、この頃には大磯の邸宅を本邸として使用していたことがうかがえます。



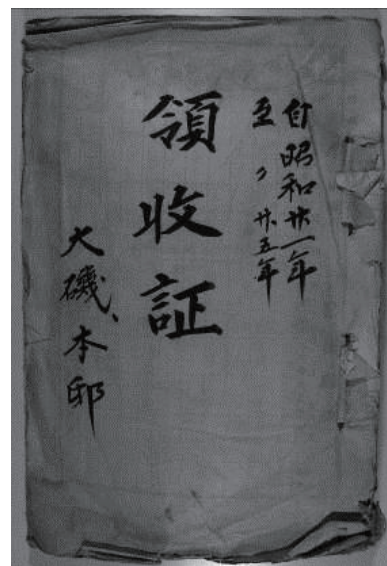
鍋島別邸の棟札



大磯の鍋島邸

### 領収証の内容

領収証が作られた昭和 21 年から 25 年は、12 代直映が昭和 18 年に没した後であり、鍋島家の当主は 13 代直泰なおやすに継がれていました。直泰の妻紀久子は、朝香宮鳩彦王の第一王女であり、領収証の宛名にもその名が見えます。



領収証綴り

時代は終戦直後ですが、水道料金や電気料金、電話料金、クリーニング代、衣服の仕立代、魚などの食品代、そして山羊の診療代やシープドッグの購入代金など、実に多様な領収証が綴られています。これらの領収証には、長島クリーニング店（統監道）、かごや（南下町）、八百清（台町）、山崎屋金物店（北本町）、日興社（北本町）、國よし（南本町）、長島商店（北下町）、久保田酒店（東小磯）、大笹屋商店（南本町）、奥野自転車店（南本町）の店名が見られ、鍋島邸と取り引きがあった主な大磯の商店であったことがわかります。

かごやは魚屋で、屋号を「宮與」と言いました。大磯には別荘を商売相手とする別荘出入りの商店がありました。このかごやも別荘出入りの魚屋で、特に梨本宮家や李王家を得意先としていました。梨本宮妃の伊都子は鍋島家の出であり、伊都子の長女（梨本宮第一王女）の方子は李王家に嫁いでいます。鍋島家の領収証からは、魚を購入している商店はかごやしがなく、得意先であったと言えるでしょう。親戚同士で同じ魚屋を得意先としていたようです。

八百清も別荘出入りの八百屋で、安田鞆彦邸や島崎藤村邸などを得意先としていました。日興社は大磯で一番古い電気屋で、大正13年に創業し別荘を相手に電気工事を請け負っていました。長島商店は小間物商、大笹屋商店は荒物商（雑貨商）です。

鍋島邸と取り引きがあった商店は、町外にもありました。領収証綴りには、平塚のオザワ時計店や稲元屋今井書店、小田原の八百八商店などの領収証があります。

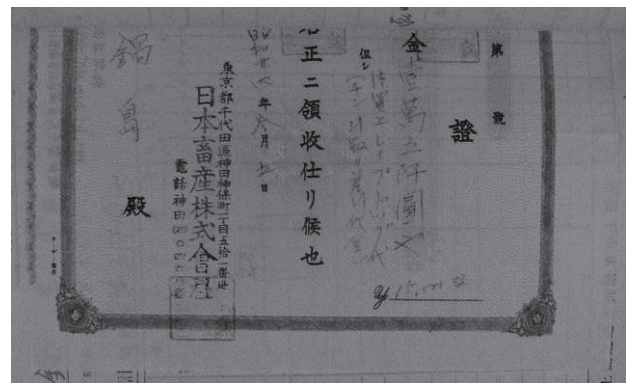
邸宅を維持するためには、植木屋や大工などの職人が欠かせません。大磯には、別荘の建築に携わった職人がたくさんいたことが知られています。領収証にもそのような職人に対して支払われたと考えられる代金が見られますが、『大磯町史』8に紹介されている職人の氏名とは一致せず、特定することができませんでした。

また、衣服の仕立代と考えられる支払いが特定の個人に支払われているため、縫製を行う専属の職人がいた可能性があります。大磯町内に在住していたかは定かではありませんが、別荘を得意先とする商

売の一業種であった可能性があります。

最後にご紹介する領収証は、家畜やペットにかかわるものです。領収証綴りからは、昭和23年7月20日に葉山町の福原農場から鶏10羽を購入していることがわかります。おそらく、家畜として鶏を飼育していたのでしょう。また、獣医に対して山羊の診療代を支払っていることから、山羊も飼育していたようです。昭和24年2月17日には、大磯山羊愛好会に対して入会金100円を支払っています。

そして、昭和24年3月5日には、日本畜産株式会社から15,000円でシープドッグを購入しています。シープドッグとは、シェットランド・シープドッグのことでしょうか。現在もペットとして人気の愛玩犬です。この領収証には、チン引取り差引代金とも書かれています。チンは日本原産で、歴史的にも長く飼われてきた愛玩犬です。



シープドッグ購入の領収証

別荘地「大磯」は、別荘を得意先とする出入りの商売が発達した地域でもありました。鍋島邸の領収証からは、そのような大磯の地域的な特徴をうかがうことができます。

#### 参考文献

- ・大磯町教育委員会編『大磯のすまい』大磯町教育委員会、1992年
- ・大磯町編『大磯の民俗』(一)、大磯町、1997年
- ・大磯町編『大磯の民俗』(二)、大磯町、1998年
- ・鈴木昇『大磯の今昔』(八)、1998年
- ・大磯町編『大磯町史』8別編民俗、大磯町、2003年
- ・公益財団法人鍋島報効会 徴古館ウェブサイト (<https://www.nabeshima.or.jp/main/>)、2021年12月12日最終閲覧

(当館学芸員／富田三紗子)

# 煉瓦造の鉄道橋梁について ～押切架道橋の建設時期と経緯～

## はじめに

JR 東海道線の茅ヶ崎～小田原にかけては、文明開化の象徴の一つでもある「赤煉瓦」で造られた橋梁や架道橋があります。鉄道唱歌にも登場する有名な馬入川の橋梁（図1）は、大正12年（1923）の関東大震災により倒壊してしまいましたが、中島川架道橋、葛川橋梁、山西橋梁、押切架道橋は今でもその雄姿を見ることができます<sup>(1)</sup>。



図1 煉瓦造の馬入川橋梁

今回は小田原市にある押切架道橋について、完成した記念式典の祝詞が残されていたので<sup>(2)</sup>、この架道橋ができた経緯について紹介しながら、併せて赤煉瓦という一側面からも若干考究してみたいと思います。

## 押切架道橋の概要

押切架道橋は、ちょうど中村川の西岸、県道松田一羽根尾線が通る交通の要衝に位置します。延長3.66m、奥行き15.22mのアーチ橋（図2）で、高さは約3.2mありますが、道路標識では3.1mの



図2 北側からみた押切架道橋

高さ制限が設けられています。それでも天井部には車両との接触による傷痕が残っています。現在でも通行可能ですが、車両のすれ違いはできません。そのためか東側にバイパスができていますが、依然として架道橋を利用する車両は少なくありません。

架道橋の南側は鉄筋コンクリート製の四角形の架道橋（図4）になっていますが、これは東海道線の複々線化に伴うものです。

## 祝詞の内容

祝詞（図3）を述べた井上浅五郎氏は、神奈川県海老原郡一色村（現中郡二宮町一色）で、明治元年（1868）4月生まれです。祝詞を述べたのが明治32年5月14日ですので、32歳の若さでした。肩書は尋常高等下中小学校長となっています。この学校は現在の小田原市立下中小学校の前身にあたります。

祝詞の前段では、交通の利便性と産業の発展は深い繋がりがあり、道路の整備や鉄道の敷設は必要不可欠なものであることが強調されています。

そして、この場所に東海道線が敷設されたとき、高さ約6mの坂道が築かれ非常に交通の便がよくなかったこと、そのため改善をお願いしていたところ、漸く<sup>ようや</sup>アーチ（架道橋）の完成をみて、なおかつ式典に参列することができ光栄である旨が述べられています。

末尾では、下中村は小田原・国府津に近く、また秦野市場もあって、このアーチの完成は単に下中村だけでなく、沿道の多くの住民の末永い幸福に繋がるものであると結ばれています。

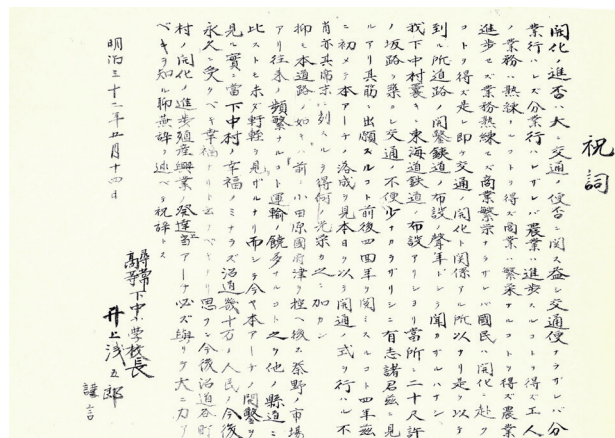


図3 祝詞

4年越しの要望により念願叶って架道橋の完成をみたわけで、喜びも一人<sup>ひとしお</sup>であったことが窺<sup>うかが</sup>えます。

## 赤煉瓦の特徴

架道橋の側壁は、現地表から1.6mまでは長手の段と小口の段が交互に積まれるイギリス積み(図5)、そこから上部、さらに天井部にかけては長手部分をジグザグに積んでいく長手積み(図6)となっています。使われている赤煉瓦の寸法は、凡そ長さ222mm、幅106～109mm、厚さ57～60mmを測ります。現在流通しているJIS規格の赤煉瓦(長さ210mm×幅100mm×厚さ60mm)より全体的に大振りで、色調もにぶい橙色をしています。

細かく観察すると、赤煉瓦の表面には縮緬状のしわがみられます(図7)。これはピアノ線で裁断された機械成形の赤煉瓦で、我が国では明治22年以降に製造されました<sup>(3)</sup>。つまり、押切架道橋が構築されたのは、使われた赤煉瓦の特徴から、少なくとも東海道線開通当初(明治20年)ではないことがわかります。

## まとめ

祝詞が書かれた明治32年は、奇しくも東海道線平塚・国府津間の複線工事が竣工<sup>(4)</sup>した年です。おそらく押切架道橋は、この改良工事とともに構築されたと考えても良いのかも知れません。赤煉瓦からは、大まかな時期しか把握できませんでした。また、製造会社を特定できるような刻印も発見するに至っていません。今後の課題とします。

今回は、二宮町教育委員会井上太郎氏(祝詞の主人公浅五郎の孫)に情報を提供していただきました。厚くお礼申し上げます。

## 註

- (1) 鈴木一男「煉瓦造の鉄道橋梁—特に馬入川橋梁を中心に—」(『湘南の考古学』六一書房、2014年)
- (2) 井上太郎『浅五郎一代記—耕餘塾の学びを活かして—』私家版、2015年
- (3) 水野信太郎『日本煉瓦史の研究』、法政大学出版局、1999年
- (4) 土木工業協会編『日本鉄道請負業史 明治篇』、鉄道建設業協会、1967年



図4 南側からみた押切架道橋



図5 側壁のイギリス積み



図6 側壁から天井部の長手積み



図7 機械成形の赤煉瓦

## 図の出典

- 図1 大磯町郷土資料館所蔵  
図2～7 井上太郎氏撮影

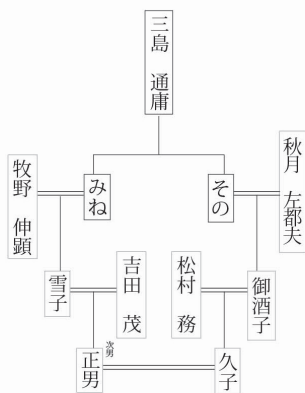
(当館学芸員／鈴木一男)

## 戦後の吉田茂と親族の交流

大磯町郷土資料館では吉田家旧蔵資料として、吉田茂に関する書簡を収蔵しています。今回はその中から、吉田茂に宛てられた親戚からの書簡に注目し、彼らがどのような交流をしていたのかを紹介します。

### 松村御酒子からの書簡

松村御酒子は、大正8年(1919)の 파리講和会議で全権顧問を務めた秋月左都夫を父に持ち、また吉田茂の妻・雪子夫人の従姉妹にあたる人物です。その娘・久子は吉田茂と雪子夫人の次男・吉田正男に嫁いでいます。



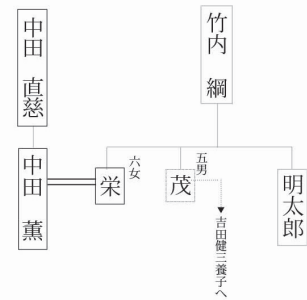
吉田茂の首相就任に際し、昭和21(1946)年5月22日付でお祝いの書簡を送っています。「雪子様あの御熱心の御ぬのりを天国より捧げられてゐられる事と心づよく存じ居り候(雪子様

のあの熱心な御祈りを、天国より捧げられていらっしゃる事と心強く存じております)」「牧野伯母上秋月父上存命なればと第一に考へ申し候、父上は満足とともに時がおそかったとなげき、叔母上は何とはなしに感激あそばす御姿目にうかび申候(牧野伯母上(牧野峰子)、秋月父上(秋月左都夫)が存命であればと第一に考えます。父上は満足と共に時が遅かったと嘆き、叔母上は何とはなしに感激あそばす御姿目が目に浮かびます。)」その祝詞は、御酒子ならではのと言えるでしょう。

### 中田栄からの書簡

吉田茂の実の妹で、東京帝国大学教授・中田薫の妻である中田栄は、昭和21年5月17日付の書簡でいち早く祝詞を伝えています。その中で、首相就任については

「平時でもなまやさしい事ではこさいますまいに、ましてこの敗戦国下、飢餓線上国の首相は全く御大変で御受なさるのがどんなにか御いやでございましたで



せうと御いたはしく御きのどくでは

ございます(平時でも(首相就任は)生易しい事ではございませんのに、ましてこの敗戦国・飢餓の状況下にある国の首相はまったく御大変でお受けになるのがどんなにか御嫌だったことでしょうかと、御いたわしく、お気の毒でございます)」と、吉田の身を特に案じています。しかし一方で、「諸巨星の中から特に衆望で兄上様の御出馬は一に御実力の結果で名誉、家門のほまれ又孝のをはりは申すまでもなく…(諸巨星の中から特に衆望によって兄上様の御出馬は一に御実力の結果であり名誉なことでもあります、家門(竹内家)の誉れであり、また孝行の終わりであることは申すまでもなく…)」と、実の兄妹ならではの賞賛の言葉を送っています。

さて、吉田と栄の間には、次のようなやり取りもありました。吉田は栄への書簡の宛先に「新潟県新潟市」とだけ記し、町名や番地など詳しい情報は書きませんでした。それでも栄の手元に届いたため、栄は「私もここには有名になった」とひそかに得意でいたところ、郵便配達員は「次からはこんな違法なのは総理大臣だろうが何だろうが遠慮なく突き返す」と大変ご立腹の様子。昭和22年10月7日の書簡で栄は「恐れ入りますがご注意願います」と吉田を奮めています。吉田の豪快な一面が垣間見えるエピソードです。

吉田茂の親類関係を辿っていくと、歴史に名を残した人物がたくさん出てきます。そうした中でも、戦後の日本を牽引することとなる吉田茂の総理大臣就任は、彼の親戚たちにとっても誇り高い出来事であったことに違いありません。

(当館学芸員/鷹野真子)